

令和 2 年 9 月 15 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02308

研究課題名（和文）Cinema and Sound in East Asian Mediasphere: in the Case of Japan and Joseon in the 1920s and 1930s

研究課題名（英文）Cinema and Sound in East Asian Mediasphere: in the Case of Japan and Joseon in the 1920s and 1930s

研究代表者

朱 宇正（Joo, Woojeong）

名古屋大学・人文学研究科・助教

研究者番号：40770524

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本と植民地朝鮮を中心とする東アジア地域におけるサウンド・メディアの発達史を、それを巡る言説の分析を通じて再検討・構成した。1920年代から1930年代にかけて、トーキー映画を中心としたサウンド・メディアの展開が、日本と朝鮮の産業関係者と批評界の評論家たちにどのような形で論じられ、理解されていたのかを調査した。その結果、トーキーは技術的には米国から輸入されたものであっても、その実践には日本と朝鮮それぞれのローカルな産業的・文化的条件が作用していたことが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今まで技術の発達史として理解されてきたサウンド・メディアの歴史を言説の観点から理解することができる。またその言説の内容を通して、東アジアにおけるサウンド・メディアの発達が米国・日本・朝鮮・中国を巡る国際的かつローカルなレベルでの多層的な過程であったことも理解できる。

研究成果の概要（英文）：This study re-examined and reconstructed the history of sound media development in East Asia, especially in Japan and Colonial Korea, through discourse analysis. I have investigated the way how the two film industries and the critics in both Japan and Korea discussed and understood the sound media development, especially the talkie, during the period from 1920s to 1930s. The result confirms that even though the talkie as technology was accepted as an import from the United States, its actual practice depended upon the local industrial and cultural conditions that were differently applied to each of the two countries.

研究分野：映画学

キーワード：サウンド・メディア トーキー 映画 1920年代 1930年代 日本 植民地朝鮮 言説分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

サウンド・メディアにおけるの今までの研究は、その技術的発達の側面およびサウンドのメディアとしての性格における理論的考察に集中してきた傾向が強かった。他方、東アジアのメディア文化の歴史にかかわる研究はそのトランスナショナル的な性格を強調しながらも、中心と周辺という二項対立的な観点を維持している場合も見える。本研究は、技術より言説、そしてメディア文化転移の線形的なモデルより多面的なモデルを踏まえて、東アジアにおける 1920 - 30 年代のサウンド・メディアの発達史を再考察することを試みた。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本と植民地朝鮮を中心とする東アジア地域におけるサウンド・メディアの発達史を、それを巡る言説の分析を通じて再検討・構成することを目指す。1920 年代から 30 年代にかけて、発声映画などの媒体を通して広がった「サウンド」が、産業的生産・メディアにおける批評・大衆による消費・政府の統制などの諸問題にどのような形で結び付けられていたのかを、帝国日本と植民地朝鮮、そしてアメリカを含む国際的な文化的交渉関係の枠組みのなかで把握する。

### 3. 研究の方法

#### 1) 言説分析

サウンド・メディア、特にトーキー映画に関して書かれた 1920 - 30 年代の文献（主に新聞と雑誌）を通して、サウンドに対する当時の産業的・批評的言説の様子を構築する。

#### 2) 産業分析

映画産業のトーキーに対する立場を検討するため、スタジオから発行された刊行物（たとえば、松竹の『蒲田』や『松竹百年史』など）と映画年鑑を調査する。

#### 3) 映画テキスト分析

日本のトーキー作品分析は国立フィルム・アーカイブ所蔵のものを中心に、1920 年代末から 1930 年代中盤まで、劇映画とドキュメンタリー両方で行う。朝鮮の場合は、残存作品に限られているため、30 年代末の若干の作品だけを対象にする。

#### 4) 二次資料調査

日本と朝鮮の発声映画初期の歴史と理論に関する最近の議論を二次資料（たとえば Aaron Gerow やチョン・ジョンファ、イ・ファジンなど）を通して検討する。

### 4. 研究成果

#### 1) 言説としてのトーキー批評

##### a. 日本の場合 - 帰山教正

日本において 1920 年代に現れた発声映画についての言説を、批評家の反応を中心にして分析した。帰山教正は、特に『キネマ旬報』を通じてアメリカの発声映画技術についての批評をトーキーが始まった初期から活発に発表していたことが分かった。彼はすでに 1910 年代から「純映画劇運動」のモットーでアメリカの近代的な映画技術の受容を主張してきた人物であるが、発声映画の場合もその「技術的」な側面に注目しながらも、アメリカの新技術がそのまま日本に適用されるには無理があるという、より慎重な立場も持っていたことが確認できた。その根拠としては、上映館のサウンド・システムの不備が一番重要に挙げられ、当時上映の問題がトーキーへの転換期に核心的なイシューであったことが分かった。

また彼はトーキー以前 1920 年代初「純映画運動」時期の著作の中でも、字幕及び弁士の役割など、無声映画の音にかかわる問題をすでに扱っていたことも分かった。これは、トーキー以後の彼の立場との連結点として示唆する場が多いと思われる。今後彼の純映画理論を映画についての一種の媒体特異性理論として捉え、トーキー理論と比較して研究をつつく必要がある。

##### b. 朝鮮の場合 - 朴と徐

サウンド・メディアの形成の過程に関わる植民地と帝国の間の関係を調べるため、日本の留学や日本映画産業に従事した経験がある批評家たち（とりわけ朴基采、徐光霽、吳泳鎮、金管、金幽影など）の評論を分析した。対象にした評論は、主に 1930 年代の大衆・文芸雑誌（『文章』、『批判』、『四海公論』、『朝光』など）から収集した。

彼らの批評の対象は、発声映画の「美学 (Aesthetics)」と「産業 (Industry)」的側面という二つの分野におおむね分けて整理することができた。まず美学的には発声映画に関するソヴィエト・モンタージュ理論の影響が強かった。それはソヴィエト理論の翻訳（特にブドフキンの著作）やモンタージュ理論を発声映画にどう適用するかについての議論から確認できる。また発声映画と他の芸術との相互関連性についての理論的考察も活発であった。

文学との間には文字の芸術である文学原作を視聴覚芸術である発声映画に翻案する時の問題について文学評論家との間に激論が起こっていた。発声映画と無声映画との関係についても、二つが連続性を持つ芸術か、お互い区別されるメディアのかが重要な論点であった。

産業的側面では日本や他の国と同じく、発声映画製作がもたらす大資本・技術装備・人力などの調達、そして製作・上映施設の整備などの問題が核心的に論じられた。ただ、朝鮮の場合、植民地という特性で、産業的な基盤は著しく弱い、結局その解決策を海外市場との連携、とりわけ日本との共同制作や日本の劇場での上映などを求めることになった特徴があった。その海外市場への進出のため、発声映画製作の必要性はさらに増え、朴基采や徐光霽などの批評家たちは、日本での経験を活かせ、監督として直接発声映画の製作まで関わったことが分かった。ただ、他方には、日本との共同制作への傾向を比較文化的観点から警戒している批評的立場も現れていた。これは「植民地啓蒙主義」と「民族主義」の間でのジレンマとして理解であると結論を下される。

## 2) 映画産業とトーキー言説

### a. 日本の場合

日本映画産業において、松竹のプロデューサー城戸四郎の場合、1928年から29年にかけて行われた彼のヨーロッパ諸国とアメリカへの訪問を取り上げ、当時発声映画技術について彼の西洋から受けた影響を追跡し、それを帰国の後彼をめぐる発声映画製作に関する動き及び言説と比較分析した。彼の伝記と当時の記事などを通して、ハリウッドで当時使用されていた複数の形式の装置(RCAのPhotophone、Western ElectricのMovietone、Warner BrosのVitaphone)を城戸が確認していたことが分かった。しかし、そういう経験が直接トーキーの製作までは繋がっていなかったものであり、その理由としては、弁士や製作環境の問題以外に、映画館という上映システムの問題が大きかったことが確認できた。

他方、昭和キネマ(以後、日本発声映画社)の皆川芳造場合は、20年代末にアメリカのリー・デ・フォーレストの発明システムPhonofilm技術を積極的に導入、『黎明』、『大尉の娘』などの作品を制作するが、こういった外国技術の適用は失敗に終わることになる。これを松竹の場合と一緒に考える時、日本でのトーキーは技術的現地化に加え、文化的交渉がかかっていた、近代化の流れの一部として理解する必要があるのが確認できた。

### b. 朝鮮の場合

植民地朝鮮の場合、最初のトーキー映画『春香伝(1935)』を制作したイ・ピルウ(李弼雨)とイ・ミョンウ(李明雨)兄弟と彼らの働いていた京城撮影所について関連資料の収集と調査が行われた。特にイ・ピルウがトーキー撮影機の開発のため、上記の松竹の城戸四郎が推進した土橋式サウンド・システムに協力していたこと、そして、そのため上海の映画界まで進出、イギリスの技術陣と接触していたことが分かった。これは当時日・朝・中・西洋を繋げる一種の国際的なサウンド・メディア開発の協力ネットワークが存在していたことを意味し、今後他の資料などを通して正確に検証することが必要である。

他方、朝鮮におけるトーキー映画の展開を製作以外にも上映と観覧の歴史として把握するため、京城のサウンド・シネマ上映文化を調査した。これによって、朝鮮の発声映画史は従来の1935年(つまり、『春香伝』の公開年度)ではなく、外国のトーキー映画が上映され始めた1920年代末までその対象時期が延び、また劇場の中に日本語や英語などが混在する多重言語的なメディア環境が存在していて、その政治的な意味が重要な言説として語られていたことが確認できた。

## 3) 日本のトーキー映画テキスト分析

1920年代末から1930年代初にかかる時期に製作された日本のトーキー劇映画とドキュメンタリー作品たちを中心にテキスト分析を行った。松竹(『大忠臣蔵』、1932年)、PCL(『純情の都』、1933年)、日活(『藤原義江のふるさと』、1930年)などそれぞれ異なる製作会社による初期のトーキー映画や、今までほぼ公開されていなかった初期の国策ドキュメンタリー(『青年日本を語る』、『輝く日本』、『大号令』など)を接することができ、当時の音楽を扱う技法や、演説・効果音などをプロパガンダとして利用する方式などを確認することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Woojeong Joo
2. 発表標題 Sound Cinema as Discourse: A Case of Film Criticism in Colonial Korea
3. 学会等名 Society for Ciname and Media Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Woojeong Joo
2. 発表標題 Imagining Sound beyond Nation : How Japan Understood and Adapted American Technology in the Early History of Sound Cinema
3. 学会等名 Society for Cinema and Media Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Woojeong Joo
2. 発表標題 A Journey to the West in Search of Sound: Cultural Negotiation Found in Japan 's Early History of Sound Cinema
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Woojeong Joo
2. 発表標題 Imagining Sound beyond Nation : How Japan Understood and Adapted American Technology in the Early History of Sound Cinema
3. 学会等名 Society for Cinema and Media Studies Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Woojeong Joo
2. 発表標題 Reconfiguring National Cinema through Sensory Experience: A Case of Colonial City, Gyeongseong
3. 学会等名 Cultural Typhoon 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Joo, Woojeong	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 276
3. 書名 The Cinema of Ozu Yasujiro: Histories of the Everyday	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----